

国立国語研究所学術情報リポジトリ

カ変動詞の一段化：東部方言を中心として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯豊, 毅一, IITOYO, Kiiti メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001778

カ変動詞の一段化

—東部方言を中心として—

飯 豊 毅 一

1. はじめに

かつて動詞の活用の種類は9種であったが、現在は5種である。その5種の活用の一つがカ変であるが、このカ変動詞にも一段化の傾向がみられることについては既に先人の説がある。

東条操氏「中央語と方言」（『現代語法の諸相』所載、昭和18年）には

“この加行変格活用も関東の各地ではほぼ上一段活用になっている。特に茨城県の北部では「き、きる、きれ、きろ」と全く一段化している。即ち否定の言い方は「きない」、仮定は「きれば」（「きろば」とも）命令は「きろ」である、未来形は勿論「きよう」である。この上一段化の傾向は東北にもあるが関東ほど優勢でない。。

と述べてある。同様なことは同氏の『方言と方言学』（昭和13年）、「標準語と方言」（『標準語と国語教育』所載、昭和15年）にも既に述べられてある。

その他、三宅武郎氏「東京下町の動詞活用について」（『音声の研究II』所載、昭和2年、コヤシナイ・キヤシナイ、コナイ・キナイについて）、

松下大三郎氏『標準日本口語法』（昭和5年、コナイ・キナイ、コラレル・キラレルについて）、

浅野信氏『巷間の言語省察』（昭和8年、コヨウ・キヨウについて）、

金田一京助氏『国語音韻論』（昭和10年、コナイ・キナイ、キナ〈命令〉について）、

島田春雄氏『明日の日本語』（昭和16年、コナイ・キナイ、コヨウ・キヨウ、コウについて）、

佐久間鼎氏『日本語のために』（昭和17年、コヤシナイ・キヤシナイについて）、

湯沢幸吉郎氏「江戸語と東京語」(『現代語法の諸相』所載, 昭和18年, 江戸語のキサッシ, キラレズについて),

金田一春彦氏(『国民科国語の指導 ヨミカタ1』所載, 昭和18年, 関東地方のキナイ・キヨウ・キル・キレバについて, 未見)

今泉忠義氏「婦人語二つ」(『コトバ』5-8所載, 昭和18年, コヤシナイ・キヤシナイ, コナイ・キナイ, コヨウ・キヨウについて)

等にもそれぞれ, これに関する記述がある。

この問題に関し, 明確な意図と企画に基づき, 全国的調査によって事実を述べたものに古く明治期国語調査委員会の『口語法調査報告書』『口語法分布図』(明治39年)がある(前記の諸氏の論述も, この書の影響を受けているとみられるものがある)。この書でカ変に関するものは第6条(命令形<コヨ・コイ・コウ等>と未然形<コヨウ・キヨウ・コウ等>)と第32条(打消形<コヌ・コナイ・キナイ等>)とである。そこで, 同書記載の報告に基づき, 「来る」の打消形として, キナイ・コナイ・コヌ等のどの形を用いるかについて, 関東地方を中心に整理するとはぼ次のようになる。

	キナイを用いる	キナイ・コナイを並用する	コナイを用いる	無記述不明等
東京	南足立郡	北豊島郡, 西多摩郡, 北多摩郡	荏原郡, 豊多摩郡, 南葛飾郡, 南多摩郡	東京市
神奈川		県下一般(キナイは稀)		
埼玉	蕨地方, 草加地方, 大宮地方, 膝折地方, 豊岡地方, 高萩地方, 秩父地方, 大里郡, 北葛飾郡	鳩ヶ谷地方, 上尾桶川鴻ノ巣地方, 川越地方, 大井地方, 所沢地方, 飯能地方(キナイ多い), 川角地方, 比企郡, 児玉郡(キナイ多い), 北埼玉郡, 南埼玉郡,		浦和地方
千葉		県下一般		
茨城	県下一般	旧土浦藩, 笠間藩		
群馬	多野郡	前橋市, 勢多郡, 高崎市, 群馬郡, 北甘楽郡, 碓氷郡, 吾妻郡(キナイは稀), 利根郡(キナイは稀), 佐波郡(コナイは稀), 新田		

		郡, 山田郡(コナイは稀), 邑楽郡(コナイは稀)	
栃木		県下一般	
山梨		北・中巨摩郡(キンを用いることあり)	県下一般
福島		平地方, 白河地方	相馬地方, 福島地方, 二本松地方, 会津地方
山形			県下一般
宮城			県下一般
岩手		或地方	県下一般
秋田			県下一般
青森		青森市	県下一般
静岡			県下一般
長野			県下一般

また「来る」の命令形として、コイ・コウ・キロ等のどの形を用いるかについては、ほぼ次のように整理することができる。

	コウを用いる	コウ・コイを並用する	コイを用いる	コイ・コロキを並用する	無記述不明等
東京	西多摩郡	荏原郡, 南多摩加住村地方	豊多摩郡, 北豊島郡, 南足立郡, 南葛飾郡, 南多摩郡, 北多摩郡,		東京市
神奈川			県下一般		
埼玉	豊岡地方, 飯能地方, 秩父郡	浦和・蕨・鳩ヶ谷地方, 鴻ノ巣地方, 膝折地方, 川越・大井・所沢地方, 高萩地方, 川角地方, 比企郡, 児玉郡, 大里郡, 北埼玉郡, 南埼玉郡	大宮地方, 草加・上尾, 桶川地方, 北葛飾郡		
千葉		県下一般			
茨城				県下一般(コイは稀)	
群馬	佐波郡	前橋市, 勢多郡, 高崎市, 群馬郡, 多野郡,	新田郡		

		北甘楽郡, 碓氷郡 (コウは稀), 吾妻郡 (コイは稀), 利根郡, 佐波郡 伊勢崎地方, 山田郡, 邑楽郡		
栃 木		県下一般		
山 梨		県下一般		
福 島	相馬地方・ 二本松地方, 白河地方, 会津地方	平地方, 福島地方		
宮 城		県下一般		
山 形			山形市, 米沢市, 南村 山郡, 西村山郡, 北村 山郡, 最上郡, 東田川 郡, 西田川郡, 西置賜 郡, 東置賜郡, 南置賜 郡, 飽海郡	東村山 郡
秋 田			県下一般	
岩 手		県下一般		
青 森		南部	津軽	
静 岡			県下一般	
長 野		稀にいう地方あり	県下一般	
新 潟	北蒲原, 中 蒲原, 西蒲 原, 南魚沼	北魚沼, 新潟	南蒲原	

また、「来る」の未来形として、コヨウ・キヨウ・コウ等のどの形を用いるかについては、次のように整理することができる。

	キヨウ	キヨウ・コヨウ	コヨウ	そ の 他	不明
東 京	南足立郡, 北多摩郡	北豊島郡, 西多摩郡	荏原郡, 豊 多摩郡, 南 葛飾郡, 南 多摩郡		東京市
神奈川			県下一般		
埼 玉	蕨地方, 膝 折地方, 豊	浦和地方, 鳩ヶ谷・ 鴻ノ巣地方, 川越・			草加, 大宮,

	岡地方, 高萩・川角地方, 秩父郡, 北葛飾郡	大井・所沢地方, 比企郡, 児玉郡, 大里郡, 南埼玉郡			上尾桶川地方, 飯能地方, 北埼玉郡
千葉		千葉郡, 海上郡	香取郡, 山武郡		
茨城		県下一般 (コヨーは稀)			
栃木	県下一般		ある地方		
群馬	北甘楽郡, 山田郡, 新田郡	前橋市, 勢多郡, 高崎市, 群馬郡, 多野郡, 碓氷郡 (コヨウは稀), 吾妻郡, 利根郡, 佐波郡 (コヨウは稀), 邑楽郡 (コヨウは稀)			
山梨	南中北巨摩郡, 西八代郡		県下一般		
福島	福島地方, 二本松地方, 白河地方	平地方		クペー・コペー=平地方, 会津地方 クペー・クッペー=相馬・福島地方, 二本松地方 クペー=白河地方	
宮城			県下一般	コペ・クベ 県下一般	
山形	南村山郡, 西村山郡, 最上郡		南置賜郡	クンベ=山形市 コペー=米沢市, 東置賜郡 クルベ・クンベ=西村山郡 クンベ・コンベ=北村山郡 クルベ=最上郡 コ・コー=東田川郡, 西田川郡	東村山郡

				コペー・クンベ=西置 賜郡 コー=飽海郡	
秋 田			県下一般		
岩 手				キベ・キルベ・クベ・ クルベ=県下一般	
青 森		石沢郡		キマショー=県下一 般	
長 野	地方あり		県下一般	コズ=地方あり	
静 岡	地方あり		県下一般	コズ=県下一般	
新 潟	東蒲原		刈羽	コー=新潟, 北蒲原, 東蒲原, 三島, 刈羽 外,	

もちろん、この明治期国語調査委員会の調査は通信により各府県に調査を委嘱したもので、各府県よりの回答には質の上で大きな違いがみられる。したがって、各地における言語使用の状態が正確に反映されているとは認めがたいが、大まかな傾向はうかがい得るものである。これによると次のようなことがわかる。

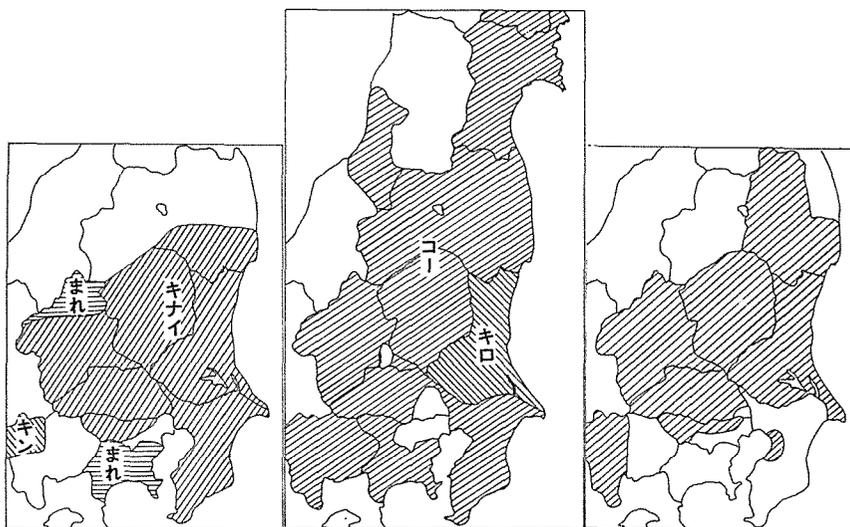
第一に「来る」の打消形としてのキナイは関東地方の全域に分布し、さらに、福島県の平地方・白河地方に及ぶ。ほかに、岩手県や青森県にも一部地域に用いられているし、山梨県の北・中巨摩郡にはキンの言い方がある。

ただし、東京の中心部には用いられず、また、神奈川県と群馬県の北部（吾妻郡・利根郡）とは稀にしか用いられない。

第二に「来る」の命令形としてのキロが茨城県下に分布する。また、コウは茨城・千葉・栃木・群馬（新田郡を除く）・埼玉（南東部を除く）・山梨の各県から東京の西部にも用いられ、さらに、長野県の一部、福島県、新潟県北部、宮城県、岩手県から青森県旧南部領にも及ぶ。

第三に「来る」の未来形としてのキヨウは、東京の東部・南部、神奈川、埼玉の一部、千葉の大部分を除くその他の関東地方の全域に用いられるほか、福島県の中通り・浜通り南部にも及ぶ。また、山形・青森・長野・静岡・新潟の各県の一部でも用いられる。

以上を関東地方を中心に大まかに図示すると、次のようになる。



第1図 キナイ・キン(M)

第2図 コウ・キロ(M)

第3図 キヨウ(M)

前述の東条操氏等の論は、このような事実に基づいたものであった。

それでは、現代においては、カ変動詞はどのような状態にあるであろうか。

2. 現代における「来る」の一段化各活用形の分布

現代における「来る」の一段化各活用形がどのように分布しているかを、関東地方を中心に面接調査によって確かめてみた。各地とも原則として、60才以上の男性を被調査者とする。

たとえば、「あそこなら今日中に行って来られる」「今日中には行って来られない」等における「来られる」「来られない」に相当する(対応する)形がどのようなものであるかをみると、第4図のようになる。図における地点は次の通り。

千葉県

- | | | |
|-------------|-----------|------------|
| 1. 館山市山萩 | 4. 勝浦市出水 | 7. 夷隅郡大多喜町 |
| 2. 安房郡富山町平群 | 5. 富津市佐貫 | 8. 長生郡一宮町 |
| 3. 鴨川市江見町 | 6. 君津市久留里 | 9. 木更津市中央 |

- | | | |
|-------------|---------------|----------------|
| 10. 長生郡本納町 | 16. 成田市宗吾 | 藏地 |
| 11. 市原市山木 | 17. 八日市場市八日市場 | 22. 東葛飾郡我孫子町布佐 |
| 12. 印旛郡八街町 | 18. 東葛飾郡関宿町 | 23. 香取郡神崎町松崎 |
| 13. 山武郡成東町 | 19. 野田市花井 | 24. 香取郡小見川町小見川 |
| 14. 八千代市萱田町 | 20. 松戸市栄町 | 25. 銚子市高神東町 |
| 15. 印旛郡白井町 | 21. 東葛飾郡我孫子町江 | |

茨城県

- | | | |
|--------------|---------------|----------------|
| 1. 古河市雷電 | 9. 鹿島郡波崎町矢田部 | 17. 水戸市西原町 |
| 2. 猿島郡境町松岡町 | 10. 土浦市大和町 | 18. 東茨城郡大洗町磯浜 |
| 3. " 岩井町辺田下 | 11. 行方郡潮来町潮来 | 19. 勝田市津田 |
| 4. 北相馬郡取手町台宿 | 12. 鹿島郡鉾田町舟木 | 20. 東茨城郡御前山村野口 |
| 5. " 利根町布川 | 13. 結城郡八千代村若 | 21. 那珂郡大宮町 |
| 6. 竜ヶ崎市田町城下 | 14. 石岡市石岡 | 22. 日立市豊浦町 |
| 7. 稲敷郡江戸崎町大町 | 15. 西茨城郡岩瀬町岩瀬 | 23. 久慈郡大子町 |
| 8. " 新利根村柴崎 | 16. " 友部町平町 | |

栃木県

- | | | |
|--------------|---------------|-----------------|
| 1. 下都賀郡藤岡町大前 | 8. 芳賀郡茂木町茂木 | 14. 那須郡西那須野町下永田 |
| 2. 足利市利保町 | 9. 那須郡烏山町中山 | 15. 那須郡黒羽町 |
| 3. 安蘇郡葛生町中央 | 10. 上都賀郡足尾町松原 | 16. 塩谷郡藤原町中三依 |
| 4. " " 水木 | 11. 今市市大沢町 | 17. " 塩原町関谷 |
| 5. 鹿沼市麻苧町 | 12. 塩谷郡藤原町滝 | 18. 那須郡那須町寺子 |
| 6. 栃木市沼和田町 | 13. 矢板市富田 | |
| 7. 河内郡上三川町 | | |

群馬県

- | | | |
|-------------|---------------|--------------|
| 1. 甘楽郡南牧村羽沢 | 7. 邑楽郡千代田村舞木 | 12. 勢多郡大胡町 |
| 2. " 下仁田町 | 8. 桐生市宮本町 | 13. 勢多郡東村荻原 |
| 3. 高崎市日光町 | 9. 吾妻郡長野原町長野原 | 14. 沼田市西倉内町 |
| 3. 伊勢崎市(今泉) | | 15. 利根郡水上町湯原 |
| 5. 太田市新井 | 10. 吾妻郡中之条町 | 16. " 片品村戸倉 |
| 6. 邑楽郡中野 | 11. 渋川市上郷 | |

埼玉県

- | | | |
|-----------|-------------|------------|
| 1. 飯能市山手町 | 3. 入間郡福岡町駒林 | 5. 入間郡越生町 |
| 2. 入間郡坂戸町 | 4. 秩父市野坂 | 6. 南埼玉郡白岡町 |

7. 比企郡小川町
8. 児玉郡児玉町小平

9. 深谷市明戸
10. 行田市真名板

東京都

1. 町田市凶師町
2. 狛江市岩戸

3. 西多摩郡五日市町
4. 東村山市秋津町

神奈川県

1. 小田原市栄町
2. 三崎市白石町
3. 横須賀市浦賀町

4. 藤沢市川名
5. 足柄上郡山北町
6. 愛甲郡愛川町田代

7. 厚木市七沢
8. 相模原市番田
9. 川崎市多摩区登戸

山梨県

1. 都留市古川渡
2. 山梨市小原東

3. 富士吉田市上吉田
4. 北巨摩郡須玉町

5. 南巨摩郡韮沢町
6. " 身延町

静岡県

1. 熱海市東海岸町
2. 沼津市岡宮

3. 御殿場市印野
4. 富士宮市東町

長野県

1. 南佐久郡小海町

2. 小諸市與良町

3. 飯山市静岡

新潟県

1. 東頸城郡松代町
2. 南魚沼郡塩沢町
3. 北魚沼郡小出町
4. " 湯の谷村
5. 長岡市西千手町

6. 北魚沼郡入広瀬村
7. 三条市(鶴田)
8. 南蒲原郡下田村
9. 東蒲原郡上川村
10. " 津川町小川

11. 新津市古田
12. 新潟市笠木
13. 新発田市外ヶ輪
14. 村上市加賀町

福島県

1. いわき市植田町
2. " 泉町
3. " 久之浜町
4. 双葉郡浪江町
5. 相馬郡鹿島町
6. 相馬市中村
7. 相馬郡新地村小川
8. 相馬市玉野
9. 双葉郡浪江町津島

10. 伊達郡靈山町大石
11. " 川俣町
12. " 梁川町
13. " 国見町
14. 福島市野田上之寺
15. 福島市松川町
16. 福島市飯坂町茂庭
17. 安達郡安達町油井
18. " 本宮町

19. 田村郡三春町
20. " 小野町
21. 郡山市湖南町福良
22. 岩瀬郡長沼町江花
23. " 天栄村白子
24. 石川郡石川町
25. 東白川郡棚倉町
26. 白河市南真舟
27. 耶麻郡猪苗代町

- | | | |
|--------------|---------------|-------------|
| 28. 喜多方市入田村 | 33. 大沼郡三島町大登 | 38. " 館岩村 |
| 29. 喜多方市上町 | 34. " 金山町川口 | 39. 大沼郡昭和村 |
| 30. 耶麻郡西会津町 | 35. 南会津郡只見町只見 | 40. 南会津郡田島町 |
| 31. 会津若松市上子町 | 36. " 南郷村山口 | |
| 32. 南会津郡下郷町 | 37. " 桧枝岐村 | |

宮城県

- | | | |
|-----------|--------------|-------------|
| 1. 伊具郡丸森町 | 6. 泉市松森 | 11. 本吉郡志津川町 |
| 2. 白石市南小路 | 7. 黒川郡大和町吉岡 | 12. 気仙沼市松岩 |
| 3. 亘理郡亘理町 | 8. 志田郡鹿島台町 | 13. 登米郡迫町 |
| 4. " 岩沼町 | 9. 桃生郡河北町川の上 | 14. 古川市下中ノ目 |
| 5. 柴田郡川崎町 | 10. " 北上町相川 | 15. 玉造郡鳴子町 |

岩手県

1. 一関市大槻町

山形県

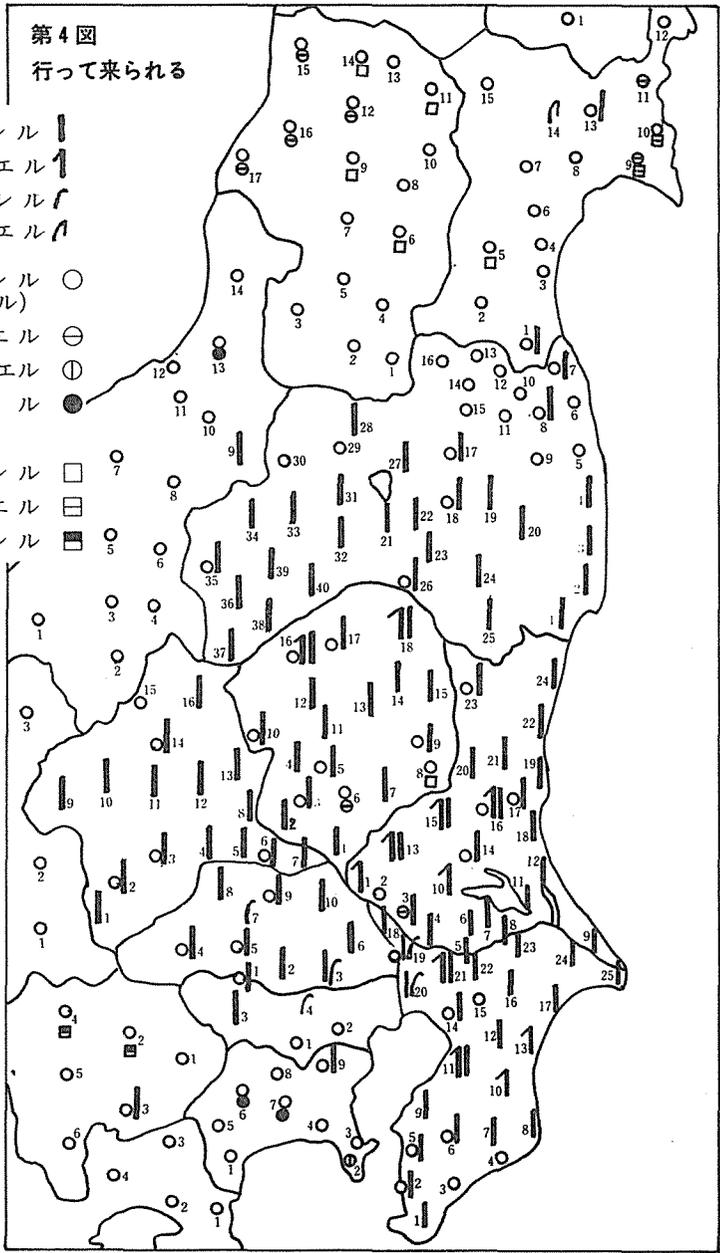
- | | | |
|------------|-------------|----------------|
| 1. 米沢市板谷 | 7. 西村山郡朝日町 | 13. 最上郡真室川町川ノ内 |
| 2. " 城南 | 8. " 河北町 | 14. 最上郡真室川町大向 |
| 3. 西置賜郡小国町 | 9. " 西川町 | 15. 飽海郡遊佐町 |
| 4. 東置賜郡高畠町 | 10. 尾花沢市寺内 | 16. 鶴岡市家中新町 |
| 5. 長井市宮横町 | 11. 最上郡最上町 | 17. 西田川郡温海町 |
| 6. 山形市双月町 | 12. " 戸沢村古口 | |

第4図に見られるように、キラレル類は東京の中心部・南部と神奈川県を除き、ほぼ関東全域に分布し、さらに福島県にも浜通り北部・中通り北部・会津北部を除いて、広く分布している。また、神奈川県と山梨県とも使用する地域があるし、宮城県北部にもキラレル・キサエルを用いる地域がある。いずれにしても、キラレル類が関東から福島県にかけて広く分布していることは注目すべきことで、このことについては筆者もかつてふれたことがあるが、^(注1) 本堂寛氏に注目すべき説がある。^(注2)

第5図は「来る」の打消の形についての分布図である。キナイが茨城県、千葉県（南部を除く）、埼玉県、群馬県、栃木県南部に分布しているさまがわかる。それは福島県浜通り南部にも及ぶ。そのほか、東京都の一部にも用いられている。この図を前の第1図と比較すると、その分布領域がほぼ重なることが

第4図
行って来られる

- キラレル 
- キラエル 
- キサレル 
- キサエル 
- コラレル  (コラル)
- コラエル 
- コーラエル 
- コレル 
- クラレル  7
- クラエル 
- フラレル  5



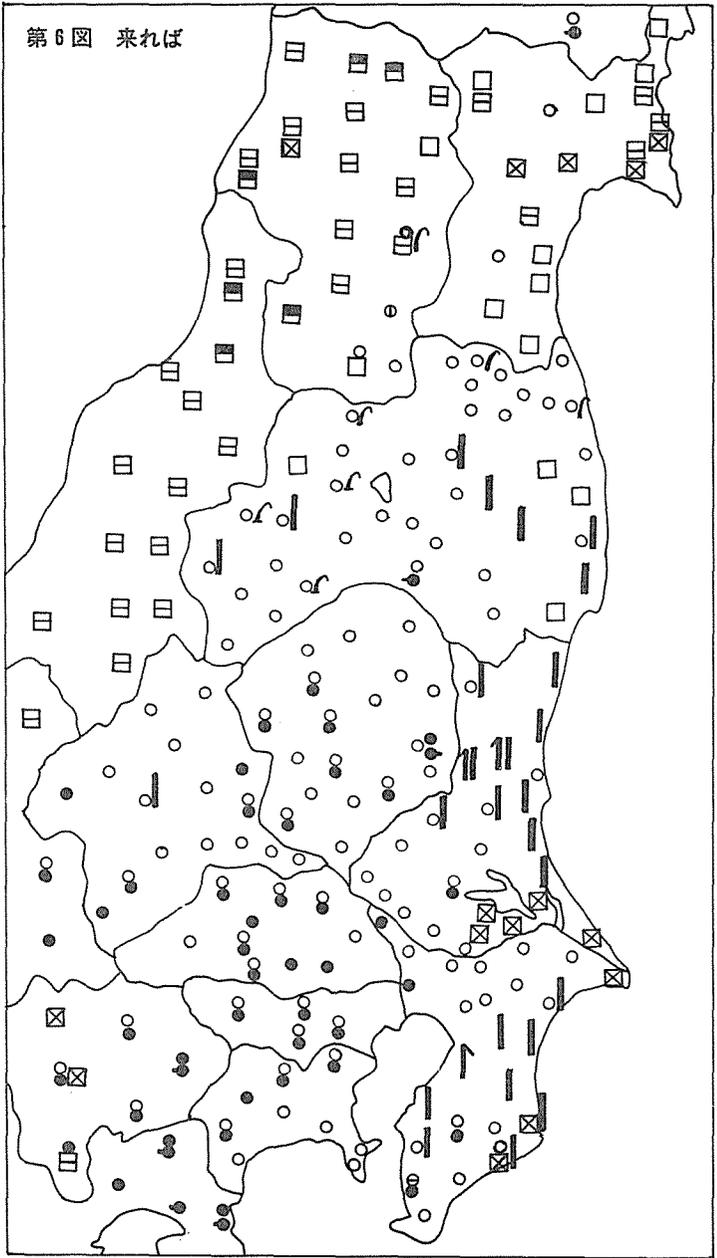
第6図 来れば

- キレバ |
- ki re : ↑
- キレ一 ↑

- コレバ □
- コエバ ▢
- ケーバ ▣
- コーバ ⊠

- クット ㄩ
- キタラ ㄩ

- クレバ ○
- クリバ ⊖
- クエバ ⊕
- クリャ ●
- クレア ●
- ku re : ●



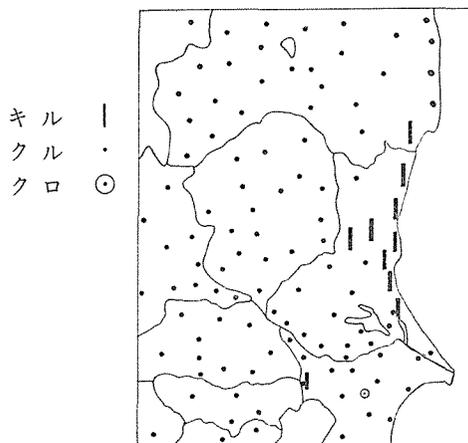
わかる。ただし、よくみると、第1図よりは分布領域が狭くなっていることに気づく。第1図が通信調査に基づく点を考慮にいれなければならないが、^(注3)福島県の場合のように特に白河地方と明記して「キナイを用ふ」と回答しているのは、それなりに根拠があつてのことだろう。とすれば、やはり、明治期に比較して現代の分布領域は、ある程度狭くなっていると考えてよさそうである。そして、第5図と第4図とを比較すると、疑いもなくキラレルよりはキナイの分布領域は狭い。

第6図は「来れば」に相当する形についての分布図である。キレバは茨城県、千葉県、福島県のかなりの地点に分布しているほか、群馬県にも1地点あるが、それらは連続しているのではない。茨城県側と千葉県側との間には、利根川流域沿いにクレバ・コーバ等が分布している。福島県浜通り南部と茨城県北部とは、地点を密にして調査すれば連続する可能性があるが、福島県の会津地方や群馬県に見られるものは明らかに非連続である。これを、どう説明すべきであろうか。かつてキラレルと同じようにキレバも関東地方から福島県にかけて広く連続分布していたが、共通語のクレバの普及によって、その連続がたちきられたと説明することは強弁であろう。何故なら、利根川流域に沿ってコーバの分布していることについて

の説明ができないからである。この問題はしばらく置いて次に進むことにする。

第7図は「来る」の連体形としてキルを用いる地域に着目したものである。茨城県中部から海岸に沿って南北に伸び福島県浜通り南部に連るほか、千葉県の一部にもみられる。これは分布領域が一層狭い。

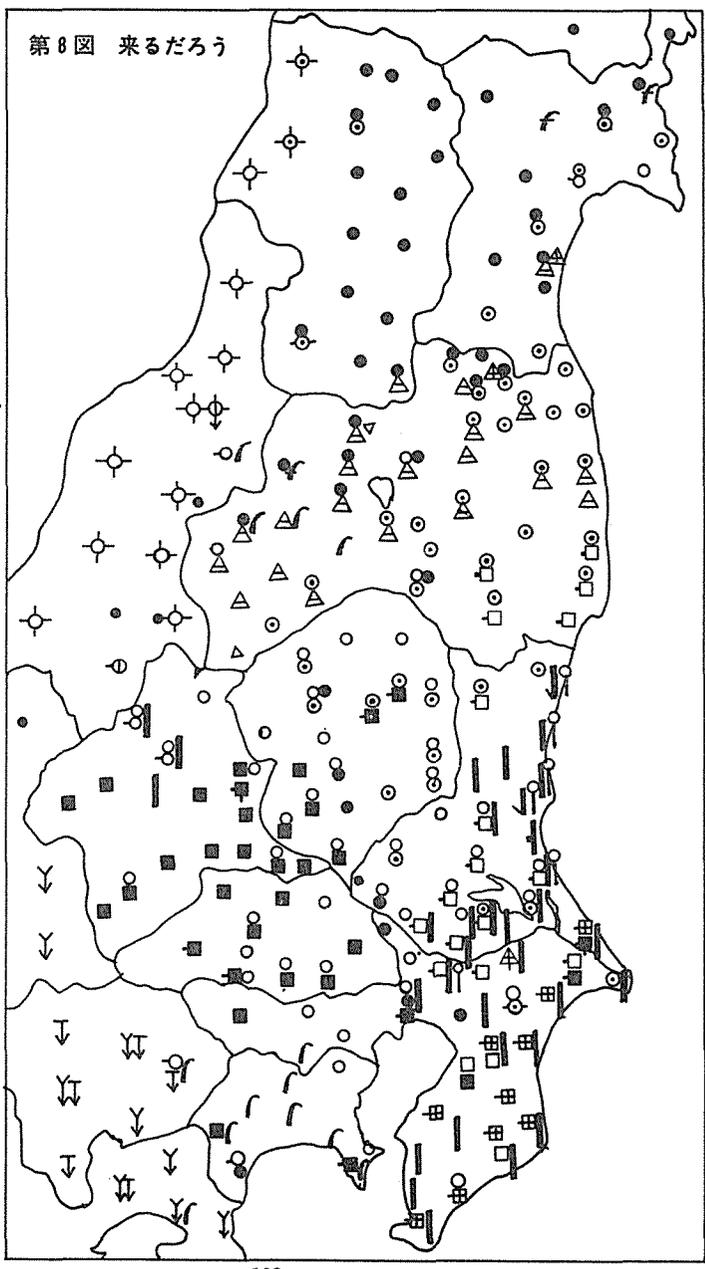
第8図は「来るだろう」



第7図 来る人

- キベー |
- キンベー |
- キッペー |
- キングッペー |
- クベー ○
- クルベー ○
- クルッペー ○
- クンベー ●
- クッペー ⊙
- クッペー ⊙
- コベー /
- コンベー f
- クルダンベー ■
- クンダンベー ■
- クッダンベー ■
- クルダッペー □
- クンダッペー □
- クッダッペー □
- クンダベー △
- クルンダベー △
- クッダベー △
- クンナベー ▽
- クルダベー △
- クルラ ↓
- クルズラ ↓
- クルロー ⊙
- クロンロー ⊙
- クンテロー ⊙
- クルダロー ●

第8図 来るだろ

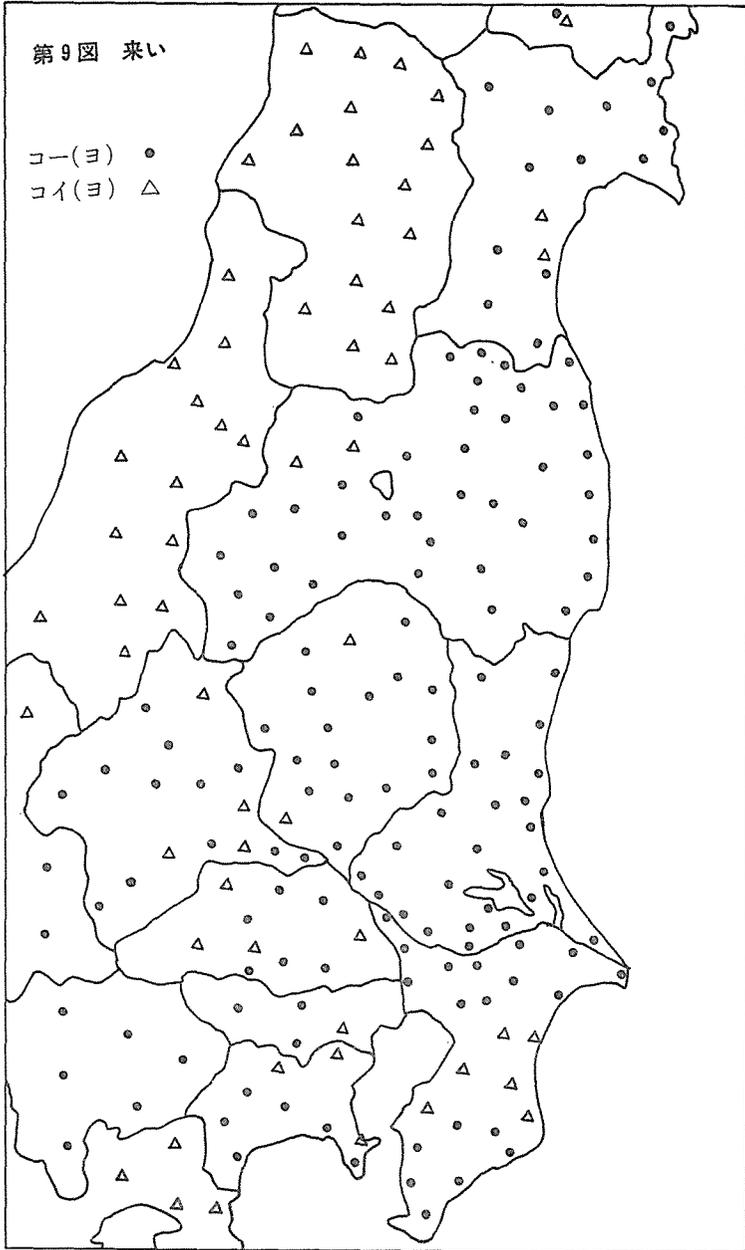


に相当する形についての分布図である。キペー・キンペー・キッペーの類が茨城県から千葉県にかけて用いられているほか、群馬県の若干地点にもみられる。意志を表わす「来よう」もこれと大局的にはかなり似ているといえるが、やや分布を異にする。すなわち、～ダンペー、～ダッペー、～ダベ、～ラ、～ズラ、～ローの類は姿を消し、代りに～ペー、～ペー、～ズ、～コー、～コヨー、～キヨーの類が姿を現わす。とは言っても、第3図のように、キヨーが広く現れることはない。その場合のキヨーはキペーと並んで千葉県にかなり多く用いられるが、そのほかは茨城県の利根川流域と群馬県中部南部に若干用いられ、東京の一部にもみられる程度である。東京を含めて関東から東北にかけて広く用いられているのは、クペー、コペー、キペー等のペーことばであり、山梨県の郡内や静岡県東部にも及ぶ（その他、静岡県、山梨県、長野県等には、コズ、コラス、クラス、新潟県や山形庄内地方には、コーが用いられている）。明治期に広く分布していたキヨーの地域が、共通語化という強い波に逆行して～ペーの地域に変化したと考えることは困難である。『口語法調査報告書』にキヨーの回答が多いのは、明治期のその通信調査の質問項目（第六条）が、

“（加行変格活用ノ）未来ニハ「こよう」「きよう」「こう」ノ何レヲ用キルカ、
となっているために、そこに掲げられた「こよう」「きよう」「こう」の三つの
選択肢から選ばねばならぬと考えたために、強いてキヨー（来よう）が選ばれた
せいであるかもしれない。

第9図は「来る」の命令形についての分布図である。関東地方では広くコーを用いており、山梨県から長野県の一部にも及ぶ。さらに、北は福島県から宮城県・岩手県にも連る。そのさまは、ほぼ第2図と似ている。ただし、新潟県北部にコーが現れない点と、第2図にみられる茨城県のキロが今回は全くみられなかった点の違いがある。特に後者は、「来る」の一段化という観点からは注目せねばならぬ。

次に、第4図、第5図、第6図、第7図、第9図を比較してみると、第4図のキラレルの分布領域が最も広く、以下順次キナイ、キレバ、キルの順に狭くなり、最後のキロの分布領域が皆無であるということになる。したがって、大まかにはカ変の一段化は関東地方を中心に考えると、茨城県を中心にキラレル



がもっとも早く発生して広く周囲に広まり、次にキナイ、キレバ、キルの順に続いたと、一見、考えられそうである。しかし、注意しなければならないことは、狭い分布領域のものにすぐ上位の分布領域のものを重ねると、心ずしも完全に覆いつくされるわけではないということである。キナイの分布領域はキラレルの分布領域に完全に覆いつくされるが、キレバの分布領域はキナイの分布領域に覆いつくされはしないし、キルの分布領域もキレバの分布領域に覆いつくされるわけではない。

のみならず、全く非連続に宮城県北部や山梨県に一段化の形が見出されるばかりでなく、明治の『口語法調査報告書』には、茨城県にキロ（命令形）の形がかなり行なわれていたことを示しているし、また、山梨県の『鯉沢町誌』（昭和14年）にも、キン（打消形、来ない）、キル・キルゾ（来る・来るぞ）の形が載っている。

これらは、どのように解釈したらよいであろうか。

3. 各地方言における「来る」の一段化

次に、手許にある方言集や研究書により、上記の分布図地点以外の各地における「来る」の一段化の様相を探ってみる。

岩手県では、たとえば、「来られる（可能）」に対応する形としては、多くコラレルを用いるが、地域によりキラレル・キラエル・キシヤエル・キレルが用いられ、筆者も大船渡市周辺や雫石町周辺で耳にしているが、本堂寛氏の報告によれば、中部及び海岸部にはかなりの地域で用いられているようである。^(注4)

青森県の南部方言では、一般に一段化は行なわれないようであるが、此島正年氏によれば、津軽では、キナエ（来ない）、キルトキ（来る時）、キレバ（来れば）のように一段化が盛んであるという。^(注5)

静岡県では、一般にカ変のままであるが、後藤一日氏によれば、遠州一帯には、キナイ（来ない）が用いられるというし、^(注6) 野元菊雄氏には、伊東市で Kijoo（意志形）を用いるという報告がある。^(注7)

山梨県の巨摩郡で古く、キン（来ない）、キル・キルゾ（来る・来るぞ）等が用いられたことはすでに述べたが、長野県でも古く、キナイ（来ない）、キ

ヨ一（意志形）があったという報告がある。(注8)

京都でも、榎垣実氏によれば、キラレル（来られる）も用いられるし、(注9) 奥村三雄氏によれば、キヨオ（将然形）も用いられている。(注10)

大阪でも、和田実氏によれば、未然形にキがあり、キラレル（来られる）、キサス（来さす）のような形が用いられるというし、(注11) 前田勇氏の『大阪弁の研究』（昭和24年）には、否定の意志形として「来よまい」が掲げられてあるが、「キヨマイ」であろうか。

兵庫県でも、和田実氏によれば、キラスのような形があるというから、(注12) 一段化の傾向を認めることができる。

中国・四国・九州では、一般にカ変のままで、一段化の報告に接することは稀であるが、糸井寛一氏の報告によれば、大分県の南豊後では中年層以下に、キウ（来よう）、キイチ（来ないで）、キラルル（来られる）、キラスル（来させる）などの形があるというから、(注13) これも一段化の傾向を示しているといえなくもない。

以上、管見に入ったもののみによっても、先に示した分布図地点以外に、岩手県、青森県の津軽地方、山梨県、静岡県、長野県、京都府、大阪府、兵庫県、大分県の各地にカ変動詞の一段化とみられる現象のあること（あるいはあったこと）がわかる。

カ変動詞の一段化に関する記述のある文献はこの外にもあろうし、文献に記述されていないものもあるであろうから、実際はもっと多くの地域にカ変動詞の一段化の現象があるものと考えられる。

4. 古文献の記述

湯沢幸吉郎氏の『室町時代言語の研究』によると、「来ル」が「出^マ」と熟合した「出^マ来^ル」は、抄物においては「出^マて来^ル」「現^マれる」「生^マずる」等の意味で用いられ、現代のように可能の意を表わす例は見当たらないというが、この「出^マ来^ル」は

“竺法蘭ノコチヘテキラルルニ逢テ。”（桃源鈔）

“スキマヲ エ テキサセヌゾ。”（史記抄）

のようにも用いられているという。しかし、単独の「来ル」はやはりカ変活用を保持していたという。

同氏の『徳川時代言語の研究』によれば、江戸時代前期の京阪地方の文献には、たとえば

“いや、もはやきられませぬ。”（重井筒）

“少し心もちよき時分我庵室にきられよ、よき薬まいらせん。”（二休咄）

“今宵持てくるも安けれ共、思ひながら擔げてもきられず。”（御前義経記）

などの例があるという。すなわち、すでに京阪地方の文献に二段化（→一段化）の例がみられる点に注目せねばならぬのであるが、実は、これらの文献よりやや早く安原貞室の『片言』に

“こなたへ来ませ。こちおはせよ。こちへこよなどいふやうの時に、。こちへきやれ。又きられよなどといへるは甚つたなきこと葉かといへり。”

とあり、京都では、すでに貞室にとって耳ざわりな語として採り上げざるを得ぬほどに、俗間に行なわれていたことを知るのである。

すでに記述した現代における京都・大阪・兵庫等における「来る」の一段化は、実に江戸時代初期に連るものであると考えられる。

それに比較して東国の文献にカ変動詞の一段化の例がみられるのは、ずっと遅れるようである。『雑兵物語』には、その例が全く見られない。比較的古い江戸資料においてその例を見出すことは困難である。刊年不詳ではあるが、江戸中期以降の上州方言の書『ところ言葉』には

“不^レ被^レ歸（カヘラレザル） きられまい。”

とあるが、これは「来られまい」であろうか。同書には他にも「返る来る」の条に「くべい」とある。すなわち、江戸時代後期には、群馬県には一段化の傾向がみられるということになる。

江戸語についても、後期資料には一段化の例がみられるようになる。とはいつても、それほど多いものではない。『浮世床』『浮世風呂』等にも、次のような例を除いては明確な例がない。

“ヤ、熊公来さっし。”（浮世床 初編上）

“ヤイ、こけへこうよ。”（浮世風呂 3の上）

“是からは、なんでもおらが内へ来さっしゃい。”（遊子方言）

湯沢幸吉郎氏の『江戸言葉の研究』には次の例がみえる。

“このころのうちに〔ソレヲ〕もってきよふ。”（徳川文芸類聚 5 和唐珍解）

“それじゃア少しばかり楽しんで来様か。”（春色雪の梅）

“なア棒組、この中ちよつと遣って来ようか。”（与話情浮名横櫛）

“いつ来られるか知れないから。”（仮名文章娘節用）

すなわち、東国の文献では江戸の後期になって、カ変動詞一段化の例がみられるとすべきであろう。

5. まとめ

以上を総合して、どのように解釈説明できるであろうか。

カ変動詞の一段化とみなされる現象は各地にある。各地を通じてキラレル（←コラレル）は広く共通に行なわれるが、その他の活用形については、どの活用形から、どれだけの活用形にわたってどの程度一段化しているかについては、それぞれの地域において一致しているわけではない。関東地方に行なわれるその一段化現象は、かなりまとまった分布を示していて、キラレル・キナイ・キレバ・キルの順に次第に分布領域が狭くなり、もっとも狭いキルがほとんど茨城県に分布していることから、茨城県を中心に一段化現象がおり、キラレルがもっとも早く行なわれて周囲に広く伝播し、続いてキナイ・キレバ・キルの順序に茨城県より広まったと解釈できそうであるが、子細に点検するなら、その分布地域が必ずしも連続してはいないことを知るのである。

まして全国的に考察するときには、すべてが一つの中心地から伝播したものと考えことは困難である。思うに、日本語動詞活用の種類がかつての9種より現在の5種に統合されてきた方向は、不必要な繁雑さを整理して単純化するという方向であろう。カ変動詞は「来る」の一語である。それは確かに重要な基本語ではあろうが、五段（四段）活用と一段活用との圧倒的な大勢には影響を受けざるを得ないであろう。二段活用に近い姿を持つカ変活用は、その地盤に→二段化→一段化という変化を促される条件があるといえなくもないのである。岩淵悦太郎氏は次のように述べている。「私の言いたいのは、表面上同じ

ように見える現象が各地に行われていても、それらは、常に何らかの直接関係を持つとは限らないことである。偶然の一致と見るべきものがあるのではないかということである。(中略)何か一定の条件が働けば、同じ日本語である以上かけ離れた土地でも、同じ変化、あるいは同じ方向の変化をする可能性があるということである。』(注14)

この各地にみられるカ変の一段化の現象も、すべてが伝播によって分布したのではなく、なかには全く相互に直接の関係を持つことなく行なわれたものも多いであろうと思われる。もちろん、関東地方における場合のように、比較的まとまりをもって分布しているものは隣接した方言社会からの刺激影響によって行なわれるようになったものも多いであろう。

が、宮城県中北部、岩手県各地、青森県津軽地方、山梨県巨摩地方、静岡県各地等をはじめ全国各地の一段化現象を、関東地方の一段化現象と伝播の関係で説明することは困難である。

ここで注目したいのは、昭和初期の山梨県皷沢町誌によれば同地に「来る」の一段化現象があったし、明治期の長野県の調査報告書によれば長野県にも一段化現象がかなりみられたし、また、明治期の国語調査委員会の報告書によれば、この一段化現象の分布領域は概して今日より広いばかりでなく、茨城県には今日ではみられない命令形の一段化形もあったということである。国語調査委員会の報告書にはかなり大まかなものもあって、その点は留意せねばならぬが、茨城県大宮町在の人の中には「故人である祖母が一段化形の命令形を使っていた」という人もいたので、『口語法調査報告書』の報告は決して荒唐無稽なのではない。すなわち、明治期において一段化の領域が広く、現代においてそれがやや狭くなっているのは、それらの領域において一度一段化したカ変動詞が再びカ変としての姿をとりもどしたものとといえるのである。

これには、交通、教育、放送、新聞、雑誌等文化的力による共通語の影響を考えなければならないであろう。言語変化においても人為が自然にうち勝つことのあることを示しているともいえる。

ところで、各地の一段化現象をみるとその発生の時期も様相も区々である。京阪地方のようにすでに『片言』に記述されているにもかかわらず、その後、

一段化の用法が何程も拡大されないで今日に及んでいるものもあるし、大分県のように、今日の中年層以下の人に用いられはじめているような場合もある。東部地方においては、その発生は江戸時代後期にあると思われるが、既述のように概していえば、明治末期から昭和初期にかけてかなりな領域に分布し、茨城県などではすべての活用形にわたって一段化さえしたが、今日はそれと比較するとやや衰退していると思われる。しかし、『口語法調査報告書』等についても、また今日の調査によっても静岡県、山梨県、長野県、宮城県等の一段化地域は関東地方と必ずしも連続してはいないし、第6図「来れば」の一段化地域について既述したように、関東地方のそれも連続していないし、かつて連続していたとも考え難い。それは福島県の場合も同様である。すなわち、関東地方を中心としたカ変の一段化においても、茨城県がその一つの大きな中心的地域であったことは確かで、この地域からの直接間接の刺激影響を受けて一段化した地域もかなりあったであろうが、しかし、常にそのすべての分布が茨城県を中心として行なわれたものとは考えられないのである。

なかには各地で相互に直接の関係を待つことなく行なわれたものも多いであろうと思われるのである。そしてそれは日本語（の各地方言）において、カ変の一段化が少なくとも潜在的に、一つの趨勢であることを示しているともみてよいであろう。

注1 「南奥方言と関東方言との境界について」（『日本の方言区画』所載）、昭和39年 なお、可能表現には、ほかに東北地方にクルニエー、クルエー等があるが、それはここでは採り上げない。

注2 「福島県における二・三の方言の古さ新しさ」（「一関工専研究紀要」第2号）、昭和43年

福島県北部の伊達郡信夫郡にキラレル系がほとんど見られないこと等に基づき、次のように説明している。「コラレル系を圧倒しながら北上し福島県にもその強い勢力を伸張させたキラレル系も、仙台中心の言語勢力を突破することはむずかしく、わずかに太平洋岸沿いに宮城県沿岸地域を北上する程度であった」

ただし、仙台弁の有力な宮城県中北部にキラレル系が分布することについて

は説明がない。

また、筆者（飯豊）の調査では、福島県北部沿岸地域、宮城県沿岸地域では、一般にコラレルを用いてキラレルは聞かれなかった。筆者はここに氏と異なる私見を以下に述べることになる。

- 注3 「序言」にも記してあるように府県により報告の精粗の別がはなはだしく、課題の把握のしかたの差を別としても、たとえば、「県下一般ニ用フ」等とあるのは、果してどれだけの地点の調査に基づくものか不明である。
- 注4 「岩手県方言の系統と区画について」（「一関工専研究紀要」第1号）、昭和42年
- 注5 『青森県の方言』（みちのく双書第21集）
- 注6 『駿遠方言考』（「静岡県方言研究会」第2集）
- 注7 「方言」（『伊東市史』資料編）
- 注8 『音韻並ニ口語法ニ関スル調査書』（信濃教育会東筑摩部会）、明治43年
- 注9 『京言葉』 昭和21年
- 注10 「京都・滋賀・福井」（『方言学講座』第3巻所載）、昭和36年
- 注11 「大阪」（『方言学講座』第3巻所載）、昭和36年
- 注12 「兵庫県高砂市伊保町」（『日本方言の記述的研究』所載） 昭和34年
- 注13 「南豊後山村方言における動詞の活用体系」（「大分大学学芸学部研究紀要 一人文・社会科学－B集」9） 昭和35年
- 注14 「言語の変化と方言区画」（『日本の方言区画』所載） 昭和39年